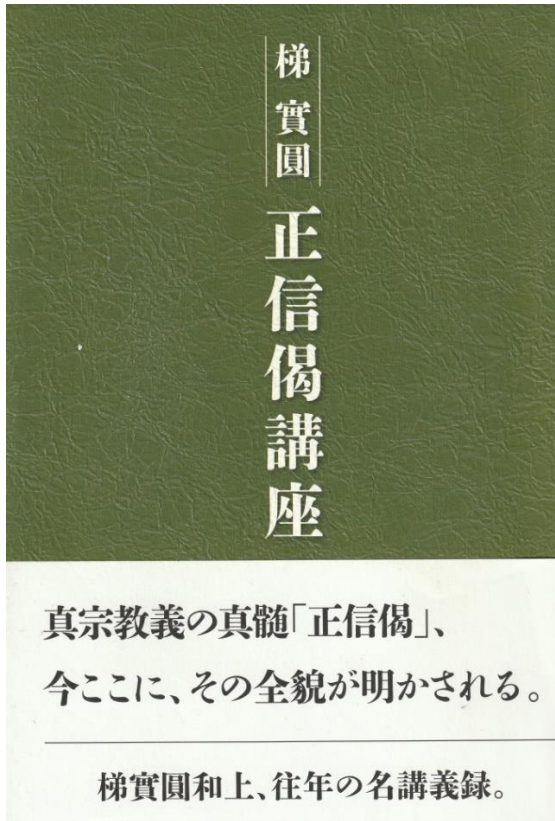


『梯 實圓正信偈講座』（2023、本願寺出版社）取意讃嘆ノート（抄録版）

文責：釋智秀（前田秀一） プロフィール



はじめに（要旨）

正信念仏偈（正信偈）」は、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人が『顕浄土真実教行証文類』「行文類」の末尾にお示しくださった、六十行百二十句のお歌です。私ども浄土真宗の門徒にとっては、最も親しみ深いお聖教です。父は、「親鸞聖人のみ教えは全て正信偈に込められている」と申しとおりました。

令和五年（2023）はご本山（西本願寺）で親鸞聖人誕生八百五十年・立教開宗慶讃法要が厳修されます。記念の年に刊行されますご縁をよろこび、御同行とともに読ませていただこうと思います。

令和五年三月

梯 信暁

目次	頁	特記事項
はじめに	4	
第一章 ご恩に報いるために	6	依経段—お釈迦様の教え
第二章 お念仏は「如来行」	19	「正信偈」とは
第三章 私達を呼び覚ます光	32	『大無量寿経』
第四章 本願名号〈南無阿彌陀仏〉の救い	49	名号による救い
第五章 念仏者は弥勒菩薩に同じ	63	親鸞聖人の心境の深まり
第六章 「如来」とは何か？	77	仏はお釈迦様だけではない
第七章 人生の荒波を超える道	91	生と死の意味づけ
第八章 尊くかけがえない者たち	104	愚かさに帰る
第九章 お念仏の道を伝えた高僧たち	118	七高僧の浄土教開顕
第十章 龍樹菩薩（一）大乘の巨人	131	依経段—七人の高僧論釈
第十一章 龍樹菩薩（二）易行道の行き方	144	一切は「空」、絶望からの「易行道」
第十二章 天親菩薩（一）真実のはたらき	157	帰命し浄土に生まれる
第十三章 天親菩薩（二）一心の功德	171	阿彌陀仏の功德
第十四章 曇鸞大師（一）大乘仏教の極致	184	「易行道」のこころ
第十五章 曇鸞大師（二）他力のこころ	197	主体は阿彌陀様
第十六章 道綽禪師（一）末法を生きる	211	自分にふさわしい教え
第十七章 道綽禪師（二）救われない理由	226	仏様の前ではあるがままに
第十八章 善導大師（一）浄土教を救った高僧	239	『観無量寿経』、仏、凡のために説く
第十九章 善導大師（二）無量寿仏の名をたもて	252	極悪人に念仏を
第二十章 善導大師（三）仏さまに認められて生きる	265	親鸞聖人は「海の思想家」
第二十一章 善導大師（四）阿彌陀仏に遇う	278	「なんまんだぶ」の仏
第二十二章 源信和尚（一）日本浄土教の黎明	292	平安文化の精神的支柱
第二十三章 源信和尚（二）仏様に背きながら	305	極悪悪人の救い
第二十四章 法然聖人（一）父の遺言を胸に	318	私度僧「聖」（ひじり）の道へ
第二十五章 法然聖人（二）四十三歳の回心	330	称名念仏は万人を救うか？
第二十六章 法然聖人（三）回心の内景	344	法然聖人「浄土宗」を開く
第二十七章 法然聖人（四）善悪を超えた世界	357	法然聖人『選択本願念仏集』を著す
第二十八章 法然聖人（五）深く信ずる心	370	深心と深信

「取意讃嘆」抄録版 目 次

題名	頁	原本 章・テーマ	
		章	テーマ
表紙・はじめに・原本目次	1		
原本目次 (pdf 版)	2		
本書 (ブログ原稿) 目次	3		
「正信偈」とは なぜ、詩の形式、序文、これが浄土真宗	4	1	ご恩に報いるため
阿弥陀仏の四十八班 (本願、誓願) 2 人の王様-世事在欧物と国王 (法蔵菩薩→阿弥陀仏)	5	2	お念仏は「如来行」
私たちを呼び覚ます光 「阿弥陀仏」、法然聖人の見方、親鸞聖人の見方	6	3	わたしたちを呼び覚ます光
本願名号「南無阿弥陀仏」の救い 名号による救い、念仏-阿弥陀仏から頂戴した「行」	6	4	本願名号「南無阿弥陀仏」の救い
「如来」とは何か 仏は、お釈迦様だけではない、念仏は如来のはたらき	7	6	「如来」とは何か
人生の荒波を超える道 法然聖人・愚かさに帰る、親鸞聖人の信心の構造	8	8	尊くかけがえのない者たち
お念仏の道を伝えた高僧たち 七人の高僧が明かしてくださったこと	9	9	お念仏の道を伝えた高僧たち
善導大師 浄土教を救った高僧 古今の過ちを正す、お釈迦様『観無量寿経』を説く 極悪人に念仏を、人間が秘めているもの	10	1 8	善導大師
源信和尚 日本の浄土教黎明 (平安文化の精神的支柱) 背いたまま包まれる	12	2 3	源信和尚
法然聖人 「浄土宗」を開く 念仏-救済の願いに包まれる	12	2 4	法然聖人
親鸞聖人 自然法爾-念仏を称えあるがままに仏となる 求道者：法然、聞法者：親鸞、「親鸞」名乗りの意味	13	9	お念仏の道を伝えた高僧たち

◆「正信偈」とは

◇親鸞聖人は多くの讃歌を造られた

親鸞聖人は天性豊かな詩才を備えた方で、漢詩形式の「正信念仏偈（正信偈）」や分かりやすい和語に訳された「和讃」など多くの讃歌を造られています。

「讃」とは、仏様の徳をほめ称える詩のことで、「和讃」（分かり易い和語翻訳）、「漢讃」（漢詩形式）、「梵讃」（梵語詩）の三種類があります。

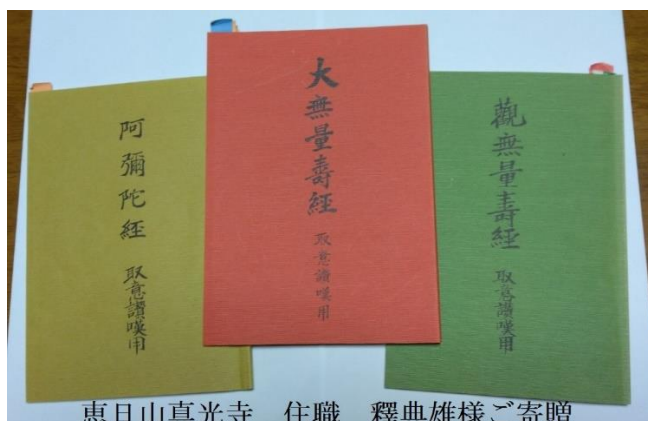
◇なぜ、詩の形式なのか

「正信偈」は「偈頌」といわれ、言葉をととのえ、韻を踏んで造られた漢詩で教義を顕す詩、いわゆる教義詩です。格調が高く非常に難しい文章です。

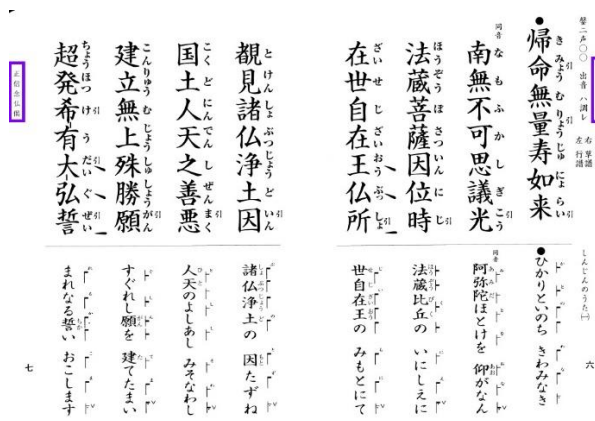
インドでは最初期から教理を詩（「偈頌」）で顕し、散文（長行）で説明する方法がとられ、龍樹菩薩著『中論』、天親菩薩著『浄土論』などがその事例です。

その背景は、経文のような尊い言葉を文字に顕すことは、その神聖性を損なうという考え方があって文字に顕すことは避けていました。その代わりに、後世への伝承手段として言葉を記憶して伝えるために韻を踏んだ詩の形を取り入れて記憶に便利のように詩、韻文にしてあります。

さらに、宗教的な心情が高まると、それを表現するとリズムミカルな言葉になりそれぞれの民族の持っている独特のリズムに合わせて読んでいくように、教えが詩の形をとって顕されてきました。



浄土三部経（取意讃嘆用・吉野北組三部経意訳編集委員会）



証信念仏偈（浄土真宗本願寺派日常勤行聖典編集委員会）

◇「正信偈」がわかれば真宗がわかる

「正信偈」は、『教行信証文類』（浄土真宗の根本聖典）1部6巻に顕されている内容を、ギリギリまで要約して讃迎し、伝承しやすいように詩の形式で説かれています。

前半部分（依経段）には、「浄土三部経」（『大無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』）、特に、お釈迦さまの教えである『大無量寿経』のところが述べられ、後半部分（依釈段）には『大無量寿経』の教えをインドから中国、そして日本の三国にわたる七人の高僧方のお勧めによって本願を信じ念仏を申す身にしていただいた教えを60行120句の短い言葉の中に込めて要約されました。

◇「正信偈」の序文

『教行信証文類』全体、すなわち浄土真宗の法義のすべてを要約するものだという意味で、初めに序文が置かれています。

「この真実の行を明かした願が、阿弥陀仏の四十八願中の「諸仏称名の願」(第十七願)である。その真実の信を明かした願は、「至心真楽の願」(第十八願)である。これがすなわち法然聖人が言われた「選択本願の行信」である。

第十七願 諸仏称名の願

たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名な称せずは、正覚を取とらじ。

第十八願 至心信楽の願

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信楽してわが国に生と欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覚を取とらじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

< 第十八願 現代語訳 >

わたしが仏になるとき、すべて人々が心から信じて、わたしの国に生まれたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生まれることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

ただし、五逆の罪(*)を犯したり、仏の教を誹謗するものだけは除かれます。

※：五種の最も重い罪(父を殺すこと、母を殺すこと、阿羅漢を殺すこと、僧の和合を破ること、仏身を傷つけること)

出典：白川晴顕 2007『聖典セミナー尊号真像銘文』本願寺出版社

その真実の行信を頂戴して救われていく「機」(救いの目当て)はどういう者かと言うと「一切善悪」、「大小凡愚」である。善人であれ悪人であれ、大乘の人であれ小乗の人であれ、どんな愚かな凡夫であっても、すべて阿弥陀様の救いの対象になっている。その人々が平等に「行信」をいただいて往生をする。その往生を「難思議往生」という。」

親鸞聖人は、「人間の思い計らいを完全に超越した、海のごとき広大無辺な絶対の真実が、阿弥陀仏の誓願のことば、本願のことばとなって私たちに届いている。それを届けてくれているお経が『大無量寿経』であって、この『大無量寿経』の宗教(究極の法義)を親鸞は〈他力真宗、浄土真宗〉と名付ける。

それを『教行証文類』としてここに開顕し、その内容を要約して〈正信念仏偈〉として顕していく」といわれています。

◇「本願を信じ念仏を申す」、これが浄土真宗

本願を信じ念仏申すという「選択本願」(法然聖人の教え)の行信を親鸞聖人は「浄土真宗」と呼ばれました。つまり、教団の名前としてではなく阿弥陀様の本願のはたらきに名付けられた言葉で、具体的には、私が今こうして本願を信じ念仏申していることを「浄土真宗」といわれたのです。

このように、浄土真宗、すなわち本願の行信を讃嘆する身になったことを慶ばれたのが「正信念仏偈」です。

◆阿弥陀仏の四十八願（本願、誓願）

◇二人の王様―世自在王仏と国王（法蔵菩薩→阿弥陀仏） ― 『大無量寿経』の説話

「世自在王仏」が出現された時に一人の国王がおられたといひます。その国王がたまたま「世自在王仏」の説法を聞いて大変感動します。そして国王は、世自在王仏に帰依して弟子になっていきます。

「世自在王仏」：「世間にあつて自在に人々を救う王様」（聖なる領域をあらわす王様）

「法を説く国王」：俗なる領域を顕わす王様（最高の富と地位と権力と名誉を持つ国王）

その国王は、世自在王仏に遇つて教えを聞いて、世俗の空しさを知り、弟子となつて、富などをすべてを捨ててしまいました。その時、この元国王に「法蔵（ダルマーカラ）」という名前が付けられました。「ダルマーカラ」は、「ダルマ・アーカラ」の略称で、「ダルマ」は「法」、「真理」という意味、「アーカラ」は「生み出す」、「源泉」、「源」という意味があります。「法蔵菩薩」は、真理を生み出し、真理を顕現させ、真理を万人のものたらしめていくものの名前として呼ばれることになりました。

法蔵菩薩は、五劫（計り知れないほどのきわめて長い時間）をかけて思惟を重ね「生きとし生けるすべての者を、善悪賢愚の隔てなく救うていく道を完成されました。その誓いを「四十八願」という誓いとして顕しました。

法蔵菩薩は、限りなく人々を救い支えるために仏陀となられ、万人を平等に救うために、「南無阿弥陀仏」という名号を人々に聞かせて、仏の徳をすべての人に与えていこうとされました。

法蔵菩薩が、兆載永劫にわたつて修業を続け、やがて光明無量・寿命無量といわれる徳を完成して、阿弥陀仏となりました。

◆私達を呼び覚ます光

『大無量寿経』では「阿弥陀仏」の原語は、「アミターバ」とあり、言語の意味から翻訳すると「無量光」となります。

しかし、これに対して中国の人は、「無量寿」と翻訳しました。おそらく、不老長寿を夢見た中国の人は、無量寿ということから、阿弥陀仏の浄土教に関心を示すようになったのでしょう。

法然聖人は、寿命を中心に見ていかれ、この世で一番大事な宝は寿命であるといわれ、阿弥陀仏の徳も命に限りがないから成立していると考えておられます。阿弥陀仏は限りのない寿命を本体とし、その仏様が一切の衆生を救っていくはたらきが光明であると説かれています。

親鸞聖人は、「阿弥陀仏」のことを「尽十方無礙光如来」、「南無不可思議光仏」と語られ、寿命のことに触れず光明を中心とした信仰形態を説かれています。「しかれば、阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなりとするべし」と阿弥陀仏は光明の仏様で、光明は知恵の形で、知恵は形のないもの、よつて阿弥陀仏は形なく十方を包み、十方の衆生を導き目覚めさせる仏様なのだと説かれています。

◆本願名号「南無阿弥陀仏」の救い

ほんがんみょうごうしやうじやうごう ししんしんぎやうがんにいん
本願名号正定業 至心信樂願為因

本願の名号は正定の業なり、至心信樂の願（第十八願）を因とす。

◇名号による救い

親鸞聖人は、阿弥陀仏の正覚（さとり）、悟りの内容を「光明」と「名号」でも顕されています。「名号」は、真宗では一番大事な事柄で、浄土真宗とは名号を中心に展開する宗教です。

「名号」は、阿弥陀仏の願い（第十八願）を具体化したものであり、その名が人々のところを如来・浄土に開き、救済していくということです。これが真宗の特徴で、阿弥陀仏、浄土といってもすべて「名号」という一点に集約されます。

◇「南無阿弥陀仏」という仏様

親鸞聖人の名号観において、仏の名前は「南無阿弥陀仏」です。

「南無」という言葉は、「帰命」と訳しますが、仏に対して帰依し、礼拝し、心から尊敬をする、という意味で、礼拝する側の心境を顕わす言葉です。

親鸞聖人は、「信心」も「帰命」も「はからいなく如来の仰せに順う」という意味にとり、両者を同義語にとされています。従って、「南無」とは、信心を顕わしており、信心を私たちに与え喚び覚ます阿弥陀仏ということで、「南無阿弥陀仏」だとおっしゃるのです

つまり、「南無阿弥陀仏」とは、「南無せしめる阿弥陀仏」、「南無という信心を与えて救う阿弥陀仏」ということです。

「南無阿弥陀仏」には、阿弥陀仏がお誓いになられた四十八の願い（誓願、四十八願）の内、根本の第十八願（本願）が込められており「本願の名号」といわれました。

親鸞聖人は、称名の主体は本来衆生であることを踏まえ善導大師が「正しく往生を決定する行業（正定業）」という考えを導入され、「本願の名号が正定の業である」と言いかえて主体を如来に転換されました。

◇念仏ー阿弥陀仏から頂戴した行

親鸞聖人は、私が念仏を称えたから私が救われるということではなく、往生成仏の大作として完成している真実行を頂戴していると了解されました。

つまり、阿弥陀仏が「私」の上に顕現し、南無（われにまかせよ）阿弥陀仏（必ず救う）と、本願の心を言葉で表し招喚されている如来の説法であるような念仏なのです。そういう念仏が「私」を救うのです。そのことを「本願名号正定業」という言葉で表現されています。

◆「如来」とは何か

◇如来とは、「如より来る」

「如」とは、「一如」あるいは「真如」と言われます。私たちの知的な、概念的な思考・判断を超えた覚りの領域です。「如」の状況を覚り、それを我々説き顕すために来る方を「如来」と言う。「如来」と

言うのは「如」の世界を私たちに告げ知らせる相^{すがた}なのだということです。お釈迦様だけでなくすべての仏陀は「如」より来る。阿弥陀の世界、私達の分別を超えた（無分別）智の領域から私達のところへ言葉をもたらし、その言葉でもって私たちをこの「如」の世界へと導いてくれるもの、それが「如来」なのです。

お釈迦様は阿弥陀仏が如来してきたのだから、その如来してきた阿弥陀仏、つまりお釈迦様は阿弥陀仏の心を説き顯す。それが釈尊の出現の使命です。

その故に、「如来、世に興出したまふゆゑは、ただ弥陀の本願海を説かんとなり」と言われるのです。

◇仏は、お釈迦様だけではない

お釈迦様とは、実は阿弥陀様が時間的に限定された形で我々の前に顯れてこられたお方だ、阿弥陀様とは、お釈迦様の悟りの内容なのだということです。お釈迦様と阿弥陀様は別物ではないのです。

阿弥陀様の智慧はお釈迦様となって私達の前に顯れる、お釈迦様の説法というものは阿弥陀様の智慧の光りなのだ、智慧の光が言葉となったものが『大無量寿経』なのだ、と説いているのです。

『大無量寿経』は、「仏様がお説きになったもの」であると同時に「仏とは何か」を説いたお経です。

坂東本という『教行証文類』の親鸞聖人自筆本には、最初は「釈迦」と書かれていた個所を、後でグシャグシャと消して「如来」と書き換えておられます。この消した跡によって親鸞聖人の心の動きが見えてくるのです。「釈迦」という固有名詞では、お釈迦様だけの話になるからです。

阿弥陀様^{すがた}が相をとって顯れてくるのはお釈迦様だけではないのです。無数の仏様方がそうなのだという事を考えて、「如来」という普通名詞を使われたのです。

『阿弥陀経』には、「恒河沙数の諸仏」と説かれ、ガンジス河の砂の数ほどもある仏様方は、皆「如来」なのだ、と。そのガンジス河の砂を全部集めたほどの仏様がいらっしゃる。そしてその仏様方が我々に教えを説き続けているというのです。仏教と言うのは仏になる教えです。

◇念仏は如来のはたらきが私の上に顯れ出たもの

法然聖人から教えられた本願の念仏とは、「〈南無阿弥陀仏〉と、阿弥陀仏のみ名を唱えよ」と言われたとおりに、口に阿弥陀仏のみ名を唱えながら生きていく姿を「念仏」と言い、本願の「行」と言います。

「念仏」とは、「私」が称えているのだけれども、それは「私」のはからいによって唱えているのではなくて、阿弥陀如来が選び定めて与えて下さった「南無阿弥陀仏」という「正定業」^{しょうじょうごう}、すなわち如来の救いのはたらきが私の口に顯れ出ている姿で、『私』が如来の行を行じている」というのが親鸞聖人のお考えです。

私が念仏を称えるということは、お釈迦様が『大無量寿経』や『阿弥陀経』お説きになっているのと同じ意味を持っています。つまり、念仏は凡夫が行っているけれども、凡夫の行いではなく、如来の行を行じていると考えるのです。

親鸞聖人は、「本願の念仏は私の行動ではなくて、如来の行動が「私」の上に顯れている尊いのはたらきである。だから念仏は上行であり、真実の行である。」とおっしゃり、阿弥陀仏の仰せのままに念仏を称えていくと教えられています。

一生懸命念仏して「これが仏様のおはからいだった」と気が付き、「励ましていただくというのは有り難いな」というふうにいただければ、それを「他力」というのです。

◆人生の荒波を超える道

みだぶつほんがねんぶつ じゃけんきょうまんなくしゅじょう しんぎょうじゅじんになん なんちゅうしなんむかし
弥陀仏本願念仏 邪見 憍慢 惡衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯

弥陀仏の本願念仏は、邪見・憍慢の惡衆生、信樂受持すること、はなはだもって難し。
難のなかの難これに過ぎたるはなし。

◇愚かさに帰る

阿弥陀仏の本願念仏は、自力をたのむ邪見で憍慢な悪人には絶対に信じることはできない。絶対にできないということは、人間の手が届くことではない。

念仏の行というのは易行であり、これ以上の易行はない。けれどもそれを信受することは難真である。行は易行、信は難信、これが『大無量寿経』の特徴です。

『阿弥陀経』の一番最後は「もろもろの衆生のために、この一切世間難信の法を説きたまふ」と書かれ、信ずることが出来ない、実は信じたのではなく、信ぜしめられたのだということを知らせようとされています。

救いの世界は、自力では絶対に理解することも、信ずることもできない。それはまったく如来の御はからいの開く世界だ。そういう領域だから、私は自分の固有の能力というものを一切はたらかせず、如来の御はからい（如来の本願の言葉）に自分のすべてを委ねる。本願の言葉は理解できる言葉ではないので、受け入れるしかないのです。これを「信」というのです。

法然聖人は、何もわからん人間になって「法」を聞けと言われていています。それが「信」の世界だと、ただ仏様の言葉が響いているだけなのです。私のはからいを離れて本願を聞くというところのみ、救いの世界は開かれていくのだということです。

◆親鸞聖人の信心の構造

「私は仏様を知ること、見ることも、わかることもできないものだ。そういう私を如来様が知り、わかり、見ていてくださる。それでよいのだ、それだけで私はかたじけないのだ。」と、主人公は仏様だ、私はその仏様に背いているが、仏様は私に責任をもって包み込んでいるのだ、という形で自分の在り場所を確認しているのです。安住の場というものがそこに開かれているのです。

親鸞聖人は、「仏様を確認し、仏様から承認を得て仏になるという従来の仏教と違う」ということで源信僧都を非常に高く評価されました。

◆お念仏の道を伝えた高僧たち

いんどさいてんしろんげ ちゅうかじちいきしこうそう けんだいしょうこう せ しょうい みょうにょうらいほんぜいおうき
印度西天之論家 中夏日域之高僧 顕大聖興世正意 明如来本聖応機

印度西天の論家 中夏（中国）・日域（日本）の高僧 大聖（釈尊）興世の正意を顕し
如来の本聖、機に應ずることを明かす

❖七高僧が明かしてくださったこと

お釈迦様がこの世に出現された本意は、『大無量寿経』を説いて阿弥陀仏の本願を明らかにすることであり、更にその阿弥陀仏の本願は末法の時代を生きる凡夫に一番ふさわしい教えであることを、印度・中国・日本の七人の高僧方が明かしてくださりました。

親鸞聖人は、七高僧を、一応、お釈迦様に対して仏弟子としておられますが、その内実は仏様だと見ておられます。この方たちの智慧の領域は仏様と同じと言ってよいのです。阿弥陀様の久遠の悟りが七人の高僧となって様々な時代と民族の中に顕れてきて下さったのです。

お念仏の道を伝えた七高僧						
出典：梯 實圓2023『正信偈講座』本願寺出版 118頁：第9章お念仏の道を伝えた高僧たち						
＜七高僧選定の基準＞ cf.p.120			＜『正信偈』＞ 善導大師の『観無量寿経疏』に基づいて書かれた cf. p.246			
①自分が浄土を願生するひとであること（単なる学問として著しただけの人ではない） ②浄土教を開顕（＊2）した著作であること ＊2：仏の真実としての初めての説明 ③著作の中に阿弥陀仏の本願力による救済を説いて強調していること ④法義上の新しい開顕があること（初見で新規性の開顕があること）			『観無量寿経』：幽閉された韋提希夫人の求めて説かれた釈迦様のお経 ⇒人間の一番醜い姿がこのお経の発端になっている ⇒どうしようもない人間に光を与えようとするお経 ⇒切羽詰まった状態の人びとの心に安らぎと豊かさを指すお経			
国名	No	高僧の名前	活動期間（注）	主著書（注）	「浄土教」の開顕	詳論（頁）
インド	1	龍樹菩薩	西暦150～250年(推)	『十住毘婆沙論』 『中論』、『十二門論』、『大智度論』	仏教の中に難行道と易行道の枠組を提唱（浄土教枠組の祖師） ⇒大乘仏教の「空」の思想の体系化。「空」：その存在を知性で捉えられないことcf.140,186	131
	2	天親菩薩	西暦400～480年	『浄土論』（『無量寿経優婆塞舎論生偈』） 世尊我一心 壽命尽十方 無礙光如來 願生安樂國（世尊よ、我に一心尽十方無礙光如來に歸命したてまつりて、安樂國に生ぜんと願す） cf162	浄土教の枠組の基本を決定（阿弥陀仏の救いを明らかにされた）	157
中国	3	曇鸞大師	西暦476～542年 538年：日本に仏教伝来	『往生論註』（『無量寿経優婆塞舎生偈』） 『観経』を初めて信仰規定経典として扱った	浄土教は易行道であると解釈論理を示した ⇒親鸞聖人が教義の視野、新たな思想的視野を開かれた	184
	4	道綽禪師	西暦562～645年 （隋・唐初期）	『安樂集』 『観経』の思想を仏教体系としてまとめた	「他力」の道（浄土の教え）が阿弥陀仏の本願念仏であると結論 ⇒「末法」の時代では凡夫の救いは浄土の教え以外には道はないと論証された	211
	5	善導大師	西暦613～681年 （隋末期・唐初期）	『観無量寿経疏』（『観無量寿経』註釈書） 「凡夫が凡夫のままでお念仏を申すことによって本願力に乗じて即時に浄土に往生する」とお釈迦様の本意が説かれている（cf p.245）	「正定業」という考えを導入し称名念仏を説かれた 仏、阿難に告げたまはく、「なんぢよくこの語を持（たも）てこの語を持てといふは、すなはちこれ無量寿経の名を持てとなり」 「極重惡人無他方便 唯称念仏得生極楽」⇒「極重惡人唯称仏」 「我亦在被攝取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」	239 (cf.260)
日本	6	源信和尚 恵心僧都（師：慈覺大僧正良源）	西暦942～1017年 （律令体制崩壊、摂関政治）	『往生要集』：日本最初の「浄土教」文獻 平安時代王朝文化の精神的支柱（西方浄土） ⇒煩惱の故に仏様の光明に照らされていることが確認できないけれど、仏様は念仏の衆生を捨てないと言われている（cf311）	「極重惡人無他方便 唯称念仏得生極楽」⇒「極重惡人唯称仏」 「我亦在被攝取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」	292(cf309) (cf310)
	7	法然聖人 法然房源空（師：恵心流・皇親阿闍梨）	西暦1133～1212年 （平安時代末・院政期）	『選択本願念仏集』 建久9年（1198）著す 阿弥陀仏は念仏以外の行を「選り捨て」 念仏を往生の行業として「選り定めた」（cf346） 『三選の文』（『選択本願念仏集』要旨） 第一章「二門章」道綽禪師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨ててまさしく浄土に帰する文 第二章「二行章」善導和尚、正雑二行を立てて、雑業を捨てて正行に帰する文 第三章「本願章」弥陀如来、余行をもって往生の本願となさず、ただ念仏をもって往生の本願となしたまへる文	建久9年の（1199）「浄土宗」立教開宗 善導大師の心「心専念弥陀名号 行住坐臥不問時節久近 念念不捨者は名正定之業 願彼仏願故（かの仏の願に願するがゆゑなり）」 ⇒念仏は私の行ではなく、如来が往生の行として定めた行だと気づき回心された (cf359)	318(cf355) (cf341)
		親鸞聖人 （得度の師・慈円僧正）	西暦1173～1263年	『願浄土真実教行証文類』（『教行信証』） 法然聖人の浄土教を全仏教の中に位置付け、 七高僧の伝灯を見直し、伝承を立てて理論的に真理性を確認して顕された。（cf124）	元仁元年（1224）4月15日『教行信証』草稿本完成、真宗立教開宗 ⇒自然法爾（展開の背景：善導大師「心専念弥陀名号・・・願彼仏願故」） （一心にもっぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念念に捨てざるは、これ正定の業と名づく） ⇒自己のほからいを打捨てて、あるがままに阿弥陀如来の誓いにすべてを生かす	真宗教団連合 (cf340)

2024年6月13日 文書：釋智秀（前田秀一）

2024年6月13日 文責：釋智秀（前田秀一）

拡大（pdf）版は最終頁添付別紙参照

❖善導大師 浄土教を救った高僧

◇如来に呼び覚まされ続ける人生 ➡ 古今の過ちを正す

「念仏では浄土に往生できない」という浄土教の危機的状況にあって、善導大師がお出ましになり、「お前たちの『観無量寿経』の理解は間違っていると諭され、『観無量寿経』領解の正しい枠組を決められました。

「念仏は即時に往生する行法である。それを可能ならしめるのは阿弥陀仏の本願力である。本願力であるが故に、どんな愚かな凡夫であっても、本願を信じて念仏すれば、本願の誓約の通りに、確実に、阿弥陀仏が成就された真実の浄土である「報土」に生まれることが出来る。凡夫が凡夫のままで、お念仏を申すことによって本願力に乗じて即時に、真実の浄土に往生する道が『観無量寿経』に説かれている。」

これがお釈迦様のご本意である、ということを『観無量寿経』の注釈書である『観無量寿経疏』によ

って確立されました。これによって念仏の教えが、再び長安や洛陽を中心にして広まっていきました。

◇お釈迦様、「勸法」を説く

韋提希夫人の要請にこたえて、お釈迦様はまず浄土、仏様や、観音・勢至などの相を心に思い描いていく十三種の観念の方法を説いていかれます。これを「定善」といいます。「定」とは心を一つのところに集中して動かさない状態です。善導大師は「定善」を、「息慮凝心」（おもんばかりをやめて心を凝らす）と言われています。

『観無量寿経』概要：

お釈迦様がいつも説法されていた霊鷲山の山裾にマガダ国の首府・王舎城という都市がありました。頻婆沙羅王という王様と韋提希夫人という王妃様の間に阿闍世という皇太子が生まれました。ところが、お釈迦様をズーッと敵視していた堤婆達多という男が、阿闍世をそそのかしてクーデターを起こさせました。阿闍世は頻婆沙羅王を倒して王位奪います。頻婆沙羅王を牢獄の中へ閉じ込め食事も与えず、水一滴も飲まさないで飢え死にさせようとしします。韋提希夫人は息子を諫めるのですがいうことを聞かない。仕方なく彼女は頻婆沙羅王のところへひそかに食物を運ぶのですが、それがばれて、自身も阿闍世によって宮廷の奥に閉じ込められます。

幽閉された韋提希夫人はお釈迦様に救いを求めます。それに応じて宮廷に駆け付けられたお釈迦様が説法されたのが『観無量寿経』です。このお経はきれいごとではじまっているのではなく、人間の一番醜い姿がこのお経の発端になっています。

どうしようもない人間に光を与えようというのが『観無量寿経』というお経なのです。そういう切羽詰まった状態の人びとの心に安らぎを与えていくのが『観無量寿経』の目指すところです。

◇極悪人に念仏を

『観無量寿経』には、最後のところに一生涯悪いことばかりしてきた人間、つまり、一生涯、「五逆罪」と「十悪」を作ってきて、とんでもない悪行を働いてきた人間が説かれています。

「五逆罪」：①父殺し、②母を殺し、③聖者を殺し、④仏身より血を出し、⑤教団の平和を乱す逆罪

「十悪」：殺生、盗み、など10種の悪業

そんな極悪人が臨終にさしかかり、もう罪滅ぼしも何もできない状態に追い込まれるのですがそんな人間にもなお救いが与えられるのです。そこに『観無量寿経』というお経の特徴が出てきます。

『観無量寿経』は、定善・散善という「善」が行える人のための道を説くとともに、三福（行福・戒福・世福）の善さえも行えないで悪いことばかりしていた「十悪」・「五逆」をつくるために生きてきたような悪人に念仏を与えて救いの道を開こうとしています。

定善や散善が出来る人にはその道を与え、何もできない人にも念仏の道を与えて救おうとされています。つまり、善人も悪人も救おうという形をとっています。

『観無量寿経』では、下品下生の人（下の下、どうしようもない人）はお浄土に生まれた場合蓮華の華の中に十二大劫（劫：極めて長い時間の単位）という非常にながい間包まれて、身動きが出来ないと説かれています。

罪の償いが終わると花が開き、お浄土に移り、観音様が来られてすべてのもののまことのすがたと、罪を除き去る教えを説かれます。この人はやっと菩提心（さとりを求める心）を発し、仏道修行をはじめていったと書いてあります。

◆今、溺れている人のために

善導大師は、浄土の教えは、死ぬまで煩惱具足の凡夫でしかありえない者、死ぬまで煩惱を垂れ流している人間、それしか生き様がない人間、そういう人間のために救いの道を開こうとするものだと、以下の様に述べられました。

「ただこの『観無量寿経』は、仏、凡のために説きたまへり、^{ひだり}聖のためにせず。」

◇人間が秘めているもの

「善人・悪人というけれども、本当は善人・悪人というものがいるわけではなく、よい時と悪い時があるだけなのである。よい時の私と悪い時の私がいるだけである。縁に応じて、縁に触れれば、何をしでかすか分からない、みんなそういう弱さ、危うさをもっている。仏様を見失って、結局は不安な状況にあるのは、善人も悪人も一緒である。」

不安な状態にある凡夫を^{こうあい}矜哀（深く憐れむ）して、本当の救いの道は阿弥陀仏の「光明」、「名号」にあることを『観無量寿経』は表わしてくださっていると、善導大師はおっしゃるわけです。

◆源信和尚 日本浄土教の黎明（平安文化の精神的支柱）

◇背いたまま包まれる

源信僧都 我亦在被摄取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身

➡ 親鸞聖人（「正信偈」）^{お、やくどいひせつしほちゆう}我亦在被摄取中 ^{ぼんのうしやうげんすい}煩惱障眼雖不見 ^{だいひるむけんじやうしやう}大悲無倦常照我

「われまたかの摄取のなかにあれども、煩惱、^{まなこ}眼を障へて、見たてまつることあたはずといへども、^う大悲憐むことなくして、つねにわが身を照らしたまふ」

「煩惱があるがために、私は自分中心にしてしかもものを考えられない。自分の都合のよいように欲を起し、自分に都合の悪いものには憎しみを起こして悩み、心を乱している。この煩惱があるために私は仏様のおすがたを見ることができないし、仏様の光明に照らされていることを私は確認することができない、誠に恥ずかしい存在だ。けれども『観無量寿経』では、「念仏衆生を摄取して捨てない」と言われている。

とすれば、仏様のみ名を称え、仏様の功德を想い浮かべている私は念仏の衆生だ。このお経に嘘がないならば、私から見ることはできないけれども、私は仏様の光につつまれ摂め取られているはずだ。」

源信僧都はこのように考えられました。「『観無量寿経』の言葉からは、仏様を見ることが出来ない私は、仏様に背いているともいえ、そのように仏様に背いているものを仏様はいつも照らし護り続けてくださり、確実に浄土へ連れて行くとしてくださる。それは、今、「念仏」していることにおいて確認することが出来、經典に「念仏衆生」と言われた言葉を私は確信します。」

◆法然聖人 「浄土宗」を開く

一心にもっぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念念に捨てざるは、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆゑなり。

◆念仏一救済の願いに包まれる

阿弥陀仏が本願の中で、「念仏しなさい、必ず救う」と誓われた念仏は、歩いている時は歩いているまま、じーとしている時はじーとしているまま、座っている時は座ったまま、寝た時は寝たまま、そのままの姿で称えるものだということです。

「時節の久遠を問わず」ということは、長い間称えようと、短い間称えようと関係ないということです。たった一声称えるだけで命が終わる人もあるし、何十年も念仏生活を送る人もある。一声で少ないということはない。百万遍でも多すぎることはない。ただ思い出すごとに称えて、念仏を捨てないこと。これを正しく往生が決定する行いといわれているのです。

法然聖人は、善導大師のこの言葉を何度も読んでいらっしゃったのですが、初めて「かの仏の願に順ずるがゆゑなり〈順彼仏願故〉」という言葉の重みに気が付かれたのです。

これまで、法然聖人は、自分で念仏を選んだと思っておられたから納得できなかったのです。

しかし称名念仏は自分が決めるのではない。仏様が決めていらっしゃる。だから私はただ仏様が決めてくださったことに随順しているのだ、と気が付かれた時に、私が念仏の主人公ではない、本当の念仏の主人公は阿弥陀様だと回心されました。

阿弥陀様が「南無阿弥陀仏」という阿弥陀仏の名を往生の行として選び取って、「これを称えてくれ」と願いを込めて私たちに与えておられる。従って、私は、私が称えた念仏で救われるのではなくて、阿弥陀仏が私を救おうとして選ばれた念仏によって救われている。私が念仏していることは、阿弥陀仏の本願に包まれていることなのです。念仏は、如来様の救済の願いに包まれていることなのだというのに、法然聖人は納得されました。

阿弥陀仏は、念仏以外の行を「選び捨て」、念仏一つを「選び取り」、念仏を往生の行業として「選び定めた」。法然聖人は、阿弥陀仏のこの「選捨」、「選取」、「選定」の「選択」を「選択本願」と呼ばれました。

◆親鸞聖人 自然法爾（念仏を称える生活の中で、その人は姿かたちがないままに仏となっている）

◆求道者：法然、聞法者：親鸞

親鸞聖人は、法然上人の教え（浄土教）が全仏教を包括する意味を持つと理論的に確認し『教行信証文類』に顕されました。

『教行信証文類』では、『華嚴経』、『涅槃経』、『維摩経』など様々な経典を引用して、浄土教の真理性を証明していかれます。その結果を踏まえて、親鸞聖人は、浄土真宗は仏教の中の一宗ではなく、仏教はこの一点に統一されると確信されました。

法然聖人は本当の意味で道を求めた求道者で、親鸞聖人は聞法者、法然聖人の求められた道の真理性

を確認した人です。だから浄土真宗は法然聖人と親鸞聖人の合作です。法然聖人の浄土宗の真実の謂れを浄土真宗と名付けるのです。

法然聖人を支えたのは善導大師ですが、それは源信僧都の『往生要集』を通して受け入れられた事実であり、源信僧都による中国の思想の解釈の助けがあって可能となりました。

◆「親鸞」の名乗りの意味

法然聖人は、浄土宗の依りどころとして「三経一論」を挙げられます。「三経」とは、浄土三部経（『大無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』）のことで、「一論」とは天親菩薩の『浄土論』を挙げられています。

しかし、『浄土論』については何も語られていないのです。「三経一論」と言いながら師資相承（師匠の教えを代々引き継ぐ）の中に天親菩薩の名前も上げておられません。

親鸞聖人は、法然聖人が曇鸞大師の書物を通して天親菩薩の『浄土論』の存在を知ったことに注目し、曇鸞大師を通して天親菩薩の『浄土論』の教えを理解するに至った経路を見出そうとされました。

曇鸞大師が天親菩薩の『浄土論』（詳しくは『無量寿経優婆提舍願生偈』）を註釈する元にしたのが龍樹菩薩でした。龍樹菩薩が仏教の中に難行道・易行道という枠組があると仰っている。曇鸞大師は、その枠組で言えば、浄土教は、難行道ではなくて易行道であると解釈論理を示されました。

実は『浄土論』に書いてあるのは菩薩道です。浄土に往生しようとする者は、礼拝・讃嘆・作願・観察・廻向という自利利他の行を修め、「妙樂勝真心」と言われる悟りに相応しい心を完成して浄土往生を実現すると言っているわけです。

これは、どう見ても天親菩薩が瑜伽行と言われる仏教をもって浄土教を解釈しているようにしか見えません。

これに対して、曇鸞大師の『往生論註』には一番最初に龍樹菩薩の「難易二道」を出し「この枠組みの中でこの書物は読むべきだ」と決めて、独自の解釈論理を示して、善導・法然に教えをつなぎ、浄土教が仏教全体を包む教義体系へ仕上げて行く道筋をつくりました。

その道筋が見えてきたときに、親鸞聖人は、天親菩薩の「親」と曇鸞大師の「鸞」をとって「親鸞」と名乗られました。



西本願寺 阿弥陀堂 帰敬式の日（2016年5月15日） 撮影：釋智秀（前田秀一）